

中国山脈の高天原楽園通信第一報

蒜山に酪農大学校を建設するのがよいの悪いの騒動は過去の物語りとなった。

新築の教室で学生は一生懸命に勉強しているし、教える先生も真剣そのものだ。

トラクターは毎日うなりながら圃場を豪走している。

晴れた日には大山の白雪が旭川に映じ、蒜山三座はどっしりした偉容を示す。

併し雨が降ると蒜山も大山もあつたものではない。寒いし、黒土（クロボク）変じて沼土と化しーコロだ。

雨量 2,000 ミリの大地にいどむ酪農業は北海道のように今からとても多忙となる。

このいそがしい時期にぶらりぶらりと参観者が訪れる。「いい景色ですなあ、ここで御暮しになると長生きするでしょう。」糞くらえだ、景色でめしがくえるか。馬鹿野郎。多頭飼育なり、協業経営で変わった方式を打出すと、ぞくぞく訪問客が押し寄せて、折角うまく行きかけた所を破壊してしまうのが、日本農村の現状だ、そつとして置いてくれないかなあ。

私が月寒の牧場にいたとき、遊覧客にはほとんど閉口した。日曜も祭日もあつたものではない。場員も気の毒だが、まして可愛相なのは緬羊である、その都度犬に追いまわられて、写真でパチパチ、決してそのスナップを送ってこないからあきれたもの。

パンフレットを入場券代りに金を取っている所もありと聞く。

併し真面目な訪問客は大歓迎だ。教えられたり、教えたりして時間なんか問題でない。第2期生が25名で少ないではないかと言われるが、応募者の中から厳選したのだ、適当な職もないので、何んとなく大学校に行つて見ようと云う人は御断り。ここは職業補導所ではない。感化院でもない。

我々は明日の農業を俺がやるんだと云う青年を育成するのが本務と考えている。不屈不撓といえ、古めかしいが、しっかりした信念をもって、立派な経営技術を身につけた人が今後の日本農業の担い手である。

農村近代化結構、農業構造改善結構、だが先ず必要なのは筋金入りの農村青年である。私がかような青年がどしどし来て戴くことを期待する。

谷間におろち（大蛇）住み、古色蒼然たる「ひきがえる」が日なたぼっこをし、夜はアベック白狐が散歩する、出雲古代文化と現代文化の臭気が交雑する天ヶ原学園で、独身の神々は限りない静けさの中で瞑想にふけりながら、酪農の進展を祈る。

蒜山はよい所ですよ、だが「酪農はらくじゃねえのう」。